霊界へ招かれざる者

遊夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊界へ招かれざる者

【Ｎコード】
Ｎ１４５２Ｙ

【作者名】
遊夜

【あらすじ】
三途の川を越えた先にある死後の世界――霊界。現世で死を迎えた者たちは、自らが死を迎えた事実を知らずに死後の世界で新たな生活を始める。その新たな生活は、現世へ再び転生を受けるまでの仮初めの時間であることを、此処にいる者たちは知らない――そう、一部の例外を除いて。霊界にとってのイレギュラーたちは、一体どんな行動を取るのだろうか？

序章～霊界のイレギュラーたち～

序章～霊界のイレギュラーたち～

現世と死後の世界を繋ぐ三途の川。その三途の川を渡った先にある死後の世界――霊界。
霊界とは現世で死を迎え、肉体を失った魂が集う非物質的な世界である。その非物質的な世界に魂が辿り着くと、生前と変わらない肉体を再び形成する。だが、その際に生前のほとんどの記憶を失う――自分が死んだという記憶さえも……。
だからこそ、この曖昧な世界は存在できているのかもしれない。だが、どの世界においても例外は付き物だ。この霊界にもそんなイレギュラーが存在した。

「こんな不可思議な事が普通にできるのに、どうして此処にいる人たちは気付かないの？　疑問に思わないの？」
腰まである亜麻色の髪を風になびかせた少女は、歌声のような澄んだ声をまるで夜の闇のような深い黒髪の少年に向かって投げ掛ける。だが投げ掛けられたのは言葉だけではなく、黒い液体の入ったペットボトルも共にである。それも少女は手足を一切使わず、まるでペットボトル自身に意思があるかのように勝手に少年の元へと飛んで行ったのだ。
けれど少年は驚いた素振りを見せる事無く、飛んできたペットボトルを右手に掴むと、キャップを開け、その液体を口から体内へ一気に流し込んだ。

「ぷはぁー！！　炭酸飲料はやっぱり一気飲みに限るな！　この喉への刺激が堪らな……って、うおっ！？」
　愁いを帯びた表情を浮かべている少女とは対照的に、少年は呑気な言葉を発する。その瞬間、地面に落ちている無数の石や岩が少年に向かって飛んで行く。それを少年は器用に避けきると、非難の眼差しを少女に向け……。
「殺す気かっ！？」
　そう叫んだ。だがそれだけであった、少年は少女が手を使う事無く石と岩を自分に向かって飛ばした事に触れる事はなかった。それは自分自身も飛んでくる物体を全て避けきるという普通の人間では考えられない事をしてみせたからだろうか。
　それに彼らは――。
「平気よ。貴方がそう簡単に私の攻撃に当たるとも思ってないし、それに私たちもう死んでるじゃない？　当たっても問題ないわ」
　そう、彼らはすでに現世を後にした者、つまり死んでいるのだ。この霊界にいる者とそこは変わらない。ただ一つ違う事は……彼らは自分たちが死んだ事を認識している事だ。それはこの霊界では、例外の出来事であった。
「いや、確かに死んでいるけど……当たったら痛いに決まってるだろ！？」
「それは私の質問に答えなかった罰よ。当たらなかったのがムカつくけど」
「まっ、それが俺の超能力だからな。……いや、もう俺たちは死んでるんだし、霊能力のが正しいか？」
　少年が言うように、彼らは生前の時には扱えなかった不思議な力が扱えるようになっていた。そんな不思議な力を扱える事が、自分自身が死んだという事実を、よりリアルに感じさせていた。
「そんな事どっちでもいいわよ！　はぁ……全く……なんで自分の死を認識しているのがこのバカだけなのかしら……」
　少女は少年に出会うまでに、数多くの人に声を掛けてきた。だが、

その結果は散々なものであり、ようやく一週間ほど前に自分の死を認識している少年に出会えたのだ。
「まっ、他にもいるだろ？　気長に捜そうぜ！」
一方、少年の方は少女と違い全く焦った様子はない。と言うよりも、この件に関して無関心なだけかもしれないが。その証拠に少年の視線は、すでに少女から外れ何処か遠くを見ている。
見ようによっては何か手掛かりを捜しているようにも見えるが、すでに一週間も行動を共にしている少女には、少年が少女と同じ考えを持っているとは到底思えなかった。
「はぁ……黒羽深夜、貴方は気楽でいいわね」
黒羽深夜と呼ばれた少年は、少女に視線を戻すと何か含みを持った笑みを浮かべ……。
「九条彩華、お前ほど神経質じゃなくて良かったとは思うな」
お返しと言わんばかりに少女の事をフルネームで呼んだ。そして皮肉を返す事も忘れない。それに対し、彩華は色白な肌を赤く染め、眉を吊り上げると深夜との距離を詰め……。
「神経質で悪かったわね！！」
深夜の肩を強く引っ叩いた。だが強くと言っても所詮は少女の力、威力などたかが知れている。深夜は表情を歪める事も無く、再び遠くを見つめる。その瞳には若干の愁いを帯びているようにも見えるが、感情的になっている彩華がそれに気付く事はなかった。
「さて、これからどうすっか？　これ以上人に話を聞いても意味無いと俺は思うけどな？」
再び深夜が彩華に視線を戻すと、この一週間に何度も言ったお決まりのセリフを口にする。いつもであれば『貴方が考えなさいよ！？』と言う言葉が返って来ていたのだが、どうやら今回は違ったようだ。
「……人に聞いてダメなら、自分たちで色々と調べるしかないようね」
そう口にして彩華は、ここから小さく見える高校――三途川高校

の校舎を見つめながらそう口にする。
　彼らはこの世界で意識が覚醒した時から、三途川高校の制服を身に纏っていた。学生服とは言いがたい黒を基調とした制服……学生服と言うより、喪服の方が近い気がすると彼らは思っていた。それはきっと、彼らが自らの死を認識しているから余計にそう思えるのであろう。
「俺は最初からそう言ってたんだけど？」
「うるさいわね！　どうせ貴方の意見の方が正しかったですよーだ！　どうもすみませんでしたー！」
　彩華はプイッと深夜から顔を背けると、拗ねていることがすぐわかる口調でそう口にする。
「うわっ……態度悪っ！？　胸が無いだけじゃなく、礼儀も無――」
　深夜の言葉をまるで遮るかのように、高速……いや、超速の速さで、先の尖った石が深夜の漆黒の髪を掠めていった。深夜はその石を飛ばした彩華の顔を覗き見ると、その表情は満面の笑み。ただし目は一切笑ってはいなかったが。
「何か……言ったかな？」
「いや、誰もお前の胸が無いとは――」
「殺す」
　言っていない。そう口にしようとした深夜であったが、最後までその言葉を口にさせては貰えなかった。どうやら彩華にとって胸の話は禁句だったようだ。
「いや、だからもう死んでるし」
「なら消滅させるまで！！　黒羽深夜！！　おとなしく私の攻撃に当たりなさいよ！！」
「いや、俺マゾじゃねぇから！！　だから逃げる！」
　そう口にした深夜は無駄の無い動きで、次々と襲って来る飛来物を避ける。その動きはまるで未来が『視えて』いるかのようである。否――視えているようではなく、彼の眼は本当に未来を見据えているのだ。まぁ死を迎えているので、未来と言っていいのかは微妙な

ところではあるが。
「あっ！　こら！　逃げるなー！！」
「いや、無理だから」
彼らがこの世界で出会ってから、彩華が深夜に向けて攻撃を仕掛ける。この光景は何度も繰り返されてきた。それは二人にとってはいつもの日常になりつつある。
「……あれがイレギュラーか」
だが今日はいつもの日常とは異なり、そんな二人のやりとりを冷めた目で見つめる傍観者がいた事を、この時、彼らはまだ知らなかった――。

第一章～生と死を与える者～第一話

第一章～生と死を与える者～

「ん……もう朝か……」
深夜は窓から差し込む眩い朝日によって目を覚ました。朝に強くない深夜はもう一度寝る事を考えたが、昨日の彩華とのやりとりを思い出し、仕方なく体を起こした。
この霊界にも現世と同じく、朝と夜が存在する。だが朝と夜が存在するだけであり、曜日や日付という概念は、この霊界には存在しない。
そして現世と大きく違う事がもう一つある。それは通貨――つまり金銭がこの霊界には存在しないことだ。彼が窓や屋根の付いている普通の部屋で寝起きできているのは、通貨が存在しない為である。この霊界では労働をすると、金銭の換わりに物品で報酬が渡されるのだ。深夜もまた労働の報酬として、この部屋を得たのである。
「すぅ……すぅ……」
深夜のすぐ隣からは、規則正しい寝息が聞こえてくる。それは一週間前から強引にこの部屋に居ついた彩華のものであった。
いつもは気の強い彩華だが、彼女もやはり女の子、こんな訳のわからない世界で一人きりになるのは不安なんだろうと、深夜は自分自身を納得させていた。
「さてと」
深夜はゆっくりと立ち上がると、一本のナイフを手に取る。そして部屋の柱に手にしたナイフで一本の線を刻み込む。
「今日で二十一日目か。なかなか進展しないものだな」
その柱には何本も線が刻まれていた。その数は二十一本――深夜

はこの日付という概念の無い霊界の中で、朝が訪れる度に一本の線をこの柱に刻んでいた。この行為に大きな意味がある訳では無い。それでも深夜は、この霊界で意識が覚醒した時から経過した日数を数えていた。

「ほら、そろそろ起きろ。今日から学校に潜入するんだろ？」

深夜は彩華の華奢な肩を掴むと、ゆっくりとその肩を揺らしながら声をかける。

「ん……いやぁ……あと……」

「あと？」

「十時間……」

「いや、それもう学校終わってるから」

彩華は朝が壊滅的に弱かった。言動もいつもの刺々しさは無く、若干幼児化している。そんな彩華に深夜は呆れた表情を浮かべるが、未だに目を瞑っている彩華にそれが伝わる事はなかった。

「じゃあ……明日からにしようよー」

「今のお前には起きるという選択肢は無いのか？　……まぁいっか。それじゃあ置いてくから飯は自分で何とかしろよ？」

「はーい」

彩華の言葉を聞くと深夜は、いつも通りに喪服に似た制服に袖を通す。そして食事も取らずに早々に部屋を後にする。そんな深夜の背中からは、再び規則正しい寝息が聞こえてくるのであった。

第一章〜生と死を与える者〜第二話

「さて、どうすっかな？　真正面から行くべきか……侵入して探るべきか……」

深夜は三途川高校の正門前で思考を巡らせていた。それは正規の手順を踏んで学校に潜入する方法と、誰にも気づかれないように秘密裏に監視する二つの方法であった。

「え、えっと……な、何かお困りでしょうか？」

深夜のその思考は女の子の声により遮られた。深夜は声のした方向に視線を移すと、そこには三途川高校の制服を身に纏った黒髪で小柄な少女の姿があった。声が少し震えているところをみると、少女がかなりの人見知りであることが予想できた。それにもかかわらず深夜に声をかけてきたのは、恐らくなかなか正門を潜らない深夜の姿を見て困っていると思ったのだろう。

人見知りでありながら、困っている人を放ってはおけない。それはとても難儀な性格だと深夜は思ったが、それと同時に少女のお人好しさに好感を抱いた。

「いや、この学校に入るにはどうすればいいのかわからなくてね」

だから深夜は素直にこの少女に尋ねてみる事にした。ここで欲している情報が手に入らなかったとしても、その時は侵入すればいい。深夜はそう思っていた。

「え、えっと……この学校に入る……ですか？　それは入学ということでしょうか？」

「そう！　まさにそれ！」

「ほ、本当ですか！？　そ、それでしたら……えっと……確かこの中に……」

深夜のその答えに、少女は嬉しそうな笑みを浮かべると、鞄の中をゴソゴソと探り始める。深夜は何故少女が笑みを浮かべ、一体何を探しているのか思考を巡らせるが、答えが出る事はなかった。

「あっ、ありました！」
少女は満面の笑みを浮かべると、鞄の中から見つけ出した物を深夜に手渡す。それは一冊のノートであった。見た目は極普通のノートであるが、ノートの表面には大きな文字で『友達紹介申請ノート』そう書かれていた。
そしてその下には小さく――白鳥初江、そう記されていた。
「えっと、こ、ここに名前を書いていただければ即日で入学できます」
「それだけでいいのか？　ありがとう！」
現世の記憶がある深夜は、あまりにも簡単に入学できる事に拍子抜けしそうになるが、もう死んでるしどうでもいいかと割り切るようにしたようだ。
深夜は初江から笑顔で友達紹介申請ノートを受け取ると、そのノートを開いた。その瞬間、深夜の頭には――真っ白。そんな言葉が浮かんだ。そう、そのノートには何も書かれていなかったのだ。
「あはは……私、友達いないんです。だ、だからそのノートも新品のままで……」
開かれた真っ白なノートを見ると、初江は力ない笑みを浮かべながらそう口にした。その笑顔はあまりにも痛々しいものであった。深夜はそんな表情を見ると、言葉を返すより先に、手に持ったボールペンをノートへ滑らせる。ボールペンの動きが止まると、ノートには一ページ分の面積に、大きく達筆な文字で黒羽深夜と書かれていた。
そして――。
「んじゃ、俺が白鳥初江の初めての友達ってわけだな？」
深夜は満面の笑みを浮かべながらノートを初江に手渡した。
「えっ！？　ど、どうして私の名前を……？」
その初江の問いに対し、深夜は笑顔のままノートの表面を指差す。
「あっ……」
「そういうこと。それじゃあ初江、これからよろしく！」

「え、えっと……し、し、深夜さん。よ、よろしくお願いします……！」

初江――そう深夜が呼んだ途端に、初江の顔は一気に朱色に染まった。そしてただでさえ小柄な体を、さらに小さくさせながら初江は深夜の言葉に答える。そんな初々しい初江の反応に、深夜の表情は自然に緩むのであった。

第一章〜生と死を与える者〜第三話

「ん……深夜、朝ご飯……」
部屋に眠たげな声が響く。だがその声に返答はない。
「……あれ？　しーんーやー？　……あっ、そうだ。先に行くとか言ってたっけ」
彩華は朝の深夜とのやりとりを思い出すと、目を擦りながらダルそうに体を起こした。眠気の大きく残った瞳で部屋を見渡すが、当然ながら深夜の姿はなかった。
「……本当に私一人を置いて行くなんて……深夜のバカ！　ご飯どうすればいいのよ！？」
彩華は料理が絶望的に下手であった。深夜と出会う以前、彩華は自らが調理した料理を口にして、一時間以上も意識を失った事がある。そんな苦く恥ずかしい経験をした彩華に、自分自身で料理を作るという選択肢は存在しなかった。
「……もう……こんな事なら一緒に行けばよかった……。いいえ、そうじゃないわね。深夜が私を待っていてくれればよかったのよ！」
そう口にしながら彩華は喪服に似た、いつもの制服に袖を通す。その首元には普段から肌身離さず身に着けている銀のネックレスに繋がれた銀の指輪が光り輝いていた。
この銀のネックレスと指輪は、この霊界で意識が覚醒した時から、すでに身に着けていたのであった。とても大切な物だという事は彩華自身わかっていたのだが、誰から貰ったかなど、銀のネックレスと銀の指輪に関しての記憶は一切覚えてはいなかった。
「あぁ！　何だか無性に腹が立ってきた！」
深夜自身が聞いたら、「なんて理不尽なんだ！」そう思うであろう一言を彩華は口にしながら、部屋を後にする。その彩華の手には一枚の座布団が握られていた。
「あの学校にいるはず。もしもいなかったら、ただじゃおかないん

だから！」
　彩華はそう口にしながら、手にしていた座布団から手を放す。だが座布団は地面に落ちる事はなかった。彩華が手を放したその位置から、一切動く事無く宙に浮いていた。
　そんな座布団に彩華はゆっくりと身を乗せた。それでも座布団は沈み込むような事はない。そして彩華が学校のある方向へ手を伸ばすと、座布団はまるで意思があるかのように動き出した。もちろん彩華を乗せたままである。
　これは彩華の扱える霊能力、つまりは物体を自分の意思で飛ばす事ができる力の応用なのだが、この力の制御はとても難しい。仮にこの世界で、彩華と同じような力を持つ者たちがいたとしても、自らの意思で飛ばしている物体の上に自分が乗る。このような芸当ができるものは、ほんの一握りであろう。それは彩華が優れた力の持ち主である事を示していた。
　そんな凄い事であると知らずに、三途川高校に向かって飛んで行く彩華。速度こそ、そこまで速くはないが、それでも彩華は確実に宙を飛んでいた。
「……そんなこともできるとはな」
　それを冷めた目で見つめている傍観者がいる事を知らずに……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1452y/

霊界へ招かれざる者

2011年11月21日20時50分発行